

開かれた技術者倫理のありかた 株式会社 日立製作所へのインタビュー

電気学会 倫理委員会

事業維持員企業への技術者倫理教育活動インタビューの第2弾として、8月23日に、(株)日立製作所 川村隆取 締役会長(写真)にインタビューに伺いました。



—川村会長は、電気学会の倫理委員会初代委員長を歴任され、技術者倫理への思い入れも強いと思いますが、技術者倫理で重要とされていることについて教えてください。

川村：一番大事なものは元気づけだと思っんですよ。「こういうことはしちゃいけない」「ああいうことはしちゃいけない」というので

はなく、電気技術者というのはどうやって社会に貢献していくのかとか、また、ものごとを判断する時には「損得」じゃなくて「善悪」で考えないといけないことなどを教えることが一番大事だと思います。

—電気学会では、昨年、技術者倫理の事例集を出版しましたが、事例集について注文はありますか？

川村：今の事例集は、事故や問題を起ささない為にはどうしたらいいか考えさせるものが多いですね。それは大切な事ですが、更に社会に貢献するためにはどうすべきか考えさせるものも必要だと思う。これからはグローバルに目を向け、海外で仕事をするためには何が必要なかを教育することが大事です。そういう意味でも、グローバルビジネスに役に立つような事例も取上げるべきだと思うんです。一日立の天津のエコシティ計画のようにインフラを海外に売り込んでいくためには、技術者という観点でその国の文化も考慮しなくては行けませんね。

川村：そうなんです。「何しちゃいけない」というのも勿論ありますが、その国が直面する問題は、先進国として我々はほとんど経験しているわけですから、それを踏まえた環境にやさしい提案ができるはずですよ。

—CSR報告書のグローバル化の中で、現地の方とのダイアログが目標と書かれていますが、そのダイアログが、この提案をする場所と考えてよろしいですか？

川村：そうですね。

—福島第一原発の事故は原子力ビジネスにとっては逆風と思いますが、これからの原子力ビジネスと技術者としてで

きることにどうしてお考えですか？

川村：今の日本は、原子力に否定的な意見も増えているが、海外に目を転じれば、産油国であっても将来の石油の枯渇を考え、また非資源国では尚更に原子力が必要と真剣に考えているところが多い。そのニーズに応えるのも先進国の技術屋の役割であると考えている。倫理的に考えれば、我々が苦勞して開発した技術に、今回の事故の経験を加味して要求に応えるのも技術者倫理の1つの応用例ではないか。

—今、円高で大変ですが、グローバル展開と技術者倫理の教育についてはいかがですか？

川村：会社としては、日本人のグローバル化もやるけど、現地で優秀な人を雇う場合も多い。その人達に技術者倫理の教育を特別やることは今は考えていない。ただし、技術指導をする時に環境汚染などの事例を取り込んでやっているのだから、それが倫理教育なのかもしれませんね。

—モノづくり教育に倫理教育が含まれているのですか？

川村：そう考えてもらってよいですよ。

—日立には“和”と“誠”と“開拓者精神”という精神がありますが、今の時代に一番必要な精神は何ですか？

川村：“開拓者精神”フロンティアスピリットですね。技術者にはビジネスや技術的な場面など色んな所で必要ですよ。

—技術者が新しい事業を切り開いていく時には、価値判断は自分に任せられているのですか？

川村：技術者は自分で決断できるようにならないといけない。だから原子力の話でも、技術はここまで進んだという事を踏まえて、この後は何をやるか？ という意思決定をするのは技術者の仕事になります。

—最後に、川村会長が一番判断に困られた経験がありましたらお話しいただけますか？

川村：社長になれと言われた時です。その時、私はグループ会社にいたので日立本体を外から眺めることができ、日立の弱点が見えた。自分が社長だったらやりたいと思ってたこともあったので、チャンスかもしれないと思って引き受けたんです。

(インタビューア：倫理委員会 土井美和子((株)東芝)、喜古俊一郎((株)日立製作所)。紙面の都合上、インタビューを短縮してまとめています。)